TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　662語

The Twin Stars

ふたごの星

Florence Holbrook（1902年の本）　**原文そのまま**　朗読：D.Scott

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　毎晩まどからのぞく明るい星。「星の中には何があるのかな？」ふたごの兄妹は、星をさがしに青い山へ出かけます。



In front of the little house was a pine-tree, and every night at the time when the children went to bed, a bright star appeared over the top of the tree and looked in at the window. The children were brother and sister. They were twins, and so they always had each other to play with.

"Now go to sleep," the mother would say when she had kissed them good-night, but it was hard to go to sleep when such a beautiful, radiant thing was shining in at the window of the little house.

"What do you suppose is in the star?" asked the sister.

"I think there are daisies and honey and violets and butterflies and bluebirds," answered the brother.

"And I think there are roses and robins and berries and humming-birds," said the sister.

"There must be trees and grass too, and I am sure there are pearls and diamonds."

"I can almost see them now," declared the sister. "I wish we could really see them. To-morrow let us go and find the star."

When morning came, the star was gone, but they said, "It was just behind the pine-tree, and so it must be on the blue mountain." The blue mountain was a long way off, but it looked near, and the twins thought they could walk to it in an hour. All day long they walked. They went through the lonely woods, they crossed brooks, they climbed hills, and still they could not find the radiant star that had looked in at their window. The hour had come when their mother always put them to bed and kissed them and said good-night, but now they had no mother, no good-night kiss, and no bed. They were tired and sleepy. They heard strange sounds in the forest, and they were frightened. "I am so tired," the sister whispered. "I am afraid a bear will come. I wish we could see the star."

The sky had grown dark, and a star could be seen here and there, but it was not their star. They went on till they could go no farther. "We will lie down on the grass," said the brother, "and cover ourselves up with leaves, and go to sleep."

Tired as they were, they did not have time to go to sleep before they heard a bear calling "Ugh! Ugh!" in the woods. They sprang up and ran out of the woods, and just before they came to the bottom of the hill, they saw right in front of them a beautiful little lake. They were not frightened any more, for there in the water was something radiant and shining. "It is our own star," said they, "and it has come down to us." They never thought of looking up into the sky over their heads. It was enough for them that the star was in the water and so near them. But was it calling them? They thought so. "Come," cried the brother, "take my hand, and

we will go to the star." Then the spirit of the skies lifted them up gently and carried them away on a beautiful cloud.

The father and mother sat alone in the little house one evening, looking sadly out of the window through which the twins had looked. "There is the star that they loved," the mother said. "I have often listened to them while they talked of it. It is rising over the pine-tree in front of the house." They sat and watched the star. It was brighter and more radiant than ever, and in it the father and mother saw the faces of their lost children. "Oh, take us too, good spirit of the skies!" they cried. The spirit heard them, and when the next evening came, close beside the star there was another star. In that were the father and mother, and at last they and the children were all very happy to be together again.

小さな家の前にマツの木が一本ありました。毎晩、子どもたちがねる時間になると、明るい星がその木のてっぺんの上にあらわれて、まどからのぞきこみました。子どもたちは、お兄ちゃんと妹でした。ふたりはふたごだったので、いつもいっしょに遊べました。

「さあ、おやすみなさい」と、お母さんはおやすみのキスをしてから言いましたが、あんなに美しくかがやくものが小さな家のまどからさしこんでいては、なかなかねむれませんでした。

「星の中には、何があると思う？」と妹がたずねました。

「ヒナギクとはちみつと、スミレとチョウチョと、青い鳥がいると思うな」とお兄ちゃんが答えました。

「わたしは、バラとコマドリと、ベリーとハチドリがいると思う」と妹が言いました。

「木や草もきっとあるし、しんじゅやダイヤモンドもきっとあるよ。」

「今にも見えそうよ」と妹は言いきりました。「本当に見られたらいいのに。あした、星をさがしに行こうよ。」

朝になると、星は消えていましたが、ふたりは言いました。「マツの木のすぐうしろにあったんだから、青い山の上にあるにちがいないよ。」青い山はずっと遠くにありましたが、近くに見えたので、ふたごは一時間で歩いていけると思いました。ふたりは一日じゅう歩きました。さびしい森を通りぬけ、小川をわたり、丘をのぼりましたが、それでも、まどからのぞいていたあのかがやく星は見つかりませんでした。いつもならお母さんがふたりをベッドに入れて、キスをして、おやすみを言ってくれる時間になりましたが、今は、お母さんもおやすみのキスもベッドもありませんでした。ふたりはつかれて、ねむくなりました。森の中からふしぎな音が聞こえてきて、ふたりはこわくなりました。「とってもつかれたよ」と妹がささやきました。「クマが来たらどうしよう。わたしたちの星が見えたらいいのに。」

空はくらくなり、あちこちに星が見えてきましたが、それはふたりの星ではありませんでした。ふたりは、もうこれ以上歩けなくなるまで歩きました。「草の上にねて、葉っぱをかぶってねむろう」とお兄ちゃんが言いました。

ふたりはつかれきっていましたが、ねむるまもなく、森の中でクマが「ウォー！ウォー！」とほえるのが聞こえました。ふたりはとびおきて森からにげだしました。丘のふもとまであと少しというところで、目の前に美しい小さなみずうみが見えました。ふたりはもうこわくありませんでした。水の中に、明るくかがやくものがあったからです。「ぼくたちの星だ」とふたりは言いました。「ぼくたちのところへおりてきてくれたんだ。」ふたりは、頭の上の空を見上げようとは思いもしませんでした。星が水の中にあって、こんなに近くにいる、それだけでふたりには十分でした。でも、星はふたりをよんでいたのでしょうか？ふたりは、そう思いました。「おいで」とお兄ちゃんがさけびました。「手をつないで。星のところへ行こう。」すると、空のせいれいがふたりをそっともち上げて、美しい雲にのせてつれていきました。

ある夕方、お父さんとお母さんは、小さな家にふたりきりですわって、ふたごがのぞいていたまどから、かなしそうに外を見ていました。「あれは、子どもたちが大好きだった星ね」とお母さんが言いました。「あの子たちがあの星の話をしているのを、よく聞いていたわ。家の前のマツの木の上にのぼってくるわ。」ふ

たりはすわって、星をながめました。星はいつもよりもっと明るくかがやいていて、その中に、お父さんとお母さんは、いなくなった子どもたちの顔を見ました。「ああ、わたしたちもつれていってください、やさしい空のせいれいさま！」とふたりはさけびました。せいれいはその声を聞きました。そしてつぎの夕方になると、その星のすぐそばに、もうひとつ星がありました。その星の中にはお父さんとお母さんがいて、とうとう家族みんながまたいっしょになれて、とても幸せになりました。

たんご と クイズ ふたごの星

star 星	**pine-tree** マツの木	**window** まど
twins ふたご	**butterflies** チョウチョ	**robins** コマドリ
bear クマ	**lake** みずうみ	

Q1 星はいつも何の木の上にあらわれた？

① カシの木　② リンゴの木　③ マツの木

Q2 ふたりが星をさがしに行こうとしたのは？

① 青い山　② 海　③ 町

Q3 みずうみの中にかがやいていたものを、ふたりは何だと思った？

① お月さま　② 自分たちの星　③ ほたる

こたえ

Q1 ③ 毎晩、子どもたちがねる時間になると、家の前のマツの木のてっぺんの上に、明るい星があらわれました。

Q2 ① 星はマツの木のすぐうしろにあったから、青い山の上にあるにちがいないと、ふたりは考えました。

Q3 ② みずうみの水の中にかがやくものを見て、ふたりは「ぼくたちの星だ。おりてきてくれたんだ」と言いました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：D.Scott（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。